

差別の撤廃と人権社会の確立にむけて

第27回人権啓発研究会・第13回和歌山・人権啓発研究会を1月31日～2月1日に白浜町でひらき、全国から約3500人が参加した。

全体集会は、2会場（A会場：白浜町立体育館、B会場：紀南文化会館）にわかれ、湯浅町の解放子ども会による和太鼓「心音」のあいさつする中澤敏浩・県連委員長



和太鼓「心音」

演奏ではじまった。心音は、部落の地場産業である皮革製品の太鼓をとおして、人権啓発の役割を担うグループとして、また伝統文化を築いていくことを目的に町内の秋祭りをさかいに「心音」としてスタートした。メンバーが高校を卒業すると同時に「初音」を卒団して、「心音」として結成し、新たに活動をつづけている。心音の演奏がはじまる。会場内の空気がピンと引き締まり、身体の芯に響く太鼓が鳴り響いた。

また、俳優で公益財団法人主催者を代表して、寺木伸明・実行委員会代表は「土地差別調査事件や『週刊朝日』差別記事事件から」もわかるように、部落を忌避する意識が根強い差別を生み出している。差別を見抜く力をこの2日間で養ってほしい」とあいさつした。

差別を見抜く力を

全体講演では、池田清郎・県連副委員長（A会場）、飯田敬文・同副委員長（B会場）から「和歌山県水平社創立90周年と和歌山県部落解放運動」について、和歌山県水平社が創立される前史、和歌山県水平社の結成、西川県議差別事件、28水害、解放運動の再建から現在の課題など、運動史について講演があった。

差別を許さない 体質づくりを

2日目は7分科会にわかれ、さまざまな人権についての学習と2地域（和歌山市平井、新宮市）にわかれてフィールドワークをおこなった。

人権啓発シリーズ講座

和歌山人権研究所が主催する人権啓発シリーズ講座が2月15日、和歌山県勤労福祉会館でひらかれ、企業者や支部66人が参加した。

3月3日～4日、第70回全国大会が東京でひらかれた。大会スローガンは「厳しい情勢を乗り越え、運動と組織の改革・強化にとりくみ、人権・平和・環境と社会連帯の実現を基軸にした部落解放運動の闘いを大きく前進させよう」と運動のあり方を点検し新たな運動の方向を確認した。

主張

解放の父・松本治一郎元 委員長長の意志を受け継ぎ

昨年12月の衆議院選挙結果を受けた大会で、自民党安倍政権の誕生で「人権の法制化」が大きく後退した。差別事件が後を絶たない現状を直視しない日本の人権政策が改めて問われている。全国大会では、夏の参議院選挙へのとりくみの強化が議論された。

「解放の議席」を失った現状をふまえ「人権・平和・環境」を基軸にした政治の実現に向けたとりくみも確認された。狭山事件は、今年で50年をむかえる。12回に及ぶ三者協議の結果、有利な証拠の開示があったが十分とはいえず、検察の隠しもつ全証拠の開示が狭山事件の勝利につながる。これらの闘いのなか、5・23狭山中央集会所に結集し、50年の闘いに決着をつける方向も確認された。

一方、プライム社による戸籍、住民票等の不正取得事件では、ハローワーク職員、警察官、携帯ショップなどから大量に個人情報が発覚された。これらにたいするとりくみとして、各市町村に「本人通知制度」の早急な導入と「戸籍制度」のあり方も議論された。

最後に、総選挙後の厳しい情勢をふまえ、人権・平和・環境・民主主義という人類普遍の原理を軸に、参議院選挙闘争に全力をあげ、改憲一戦争への道を阻止し「人権侵害救済法」制

度を求める闘いを再構築し、半世紀をむかえる狭山闘争に勝利するためにも、組織を強化することを誓い合った。そして、ネット上の差別情報の氾濫や差別落書など悪質な差別事件の背景にある格差拡大社会・弱肉強食社会をなくすために「プラ

イム事件」の真相究明をすすめることも決定した。軍国主義時代に節を曲げず闘った解放の父・松本治一郎元委員長など先人の苦闘を受け継ぎ、部落完全解放・人間解放の大道を突きすすもう。

狭山事件を 考えよう



私が狭山事件を初めて知ったのは中学校に入学した頃でした。新宮の地において子ども専任主事制度が行政に位置づけられるなか、子ども会活動が行政責任として再スタートし、市内同和地区の中学生を一同に集め、子ども会中学生部が結成されました。毎週、木曜日には生活指導として、部落問題の学習会が開催され部落の歴史などもちろんのこと、狭山事件の劇画冊子を教材とし、狭山と部落問題を毎週勉強してきました。

また、夏期には中学生の合宿があり、そこで基礎学力向上のための勉強会とともに狭山を中心とした部落問題の学習会なども勉強しました。そのころ狭山の闘争は、不当な寺尾判決を受けるなか、全国的に運動が盛り上がりつつあり、東京で

今年には事件から50年を迎える節目の年であり、長い間の闘いの成果として、再審を開始させ、狭山闘争に勝利することを願い、決意を新たにしているものであります。

文化の窓

「ある一日」

小さな「いきもの」の命が芽吹く瞬間。誰もが自然の流れのなかでの出産を望む。「こんどこそこの世にうまれてきてくれる」ことを節に願う園子は、バースプランを記す。自殺、ネグレクト、乳児殺害、虐待……。大切な一つの命が奪われる毎日。「ある一日」では、何億何万のまなざしが、いっせいに「いきもの」にふりむく。 著者：いしい しんじ



お問い合わせは県連・教宣部まで
TEL 073-473-2301